

決勝戦の激闘を振り返る

鹿屋中央の七島投手、神村学園の東投手による県内屈指の好投手対決は息詰まる投手戦でスタート。

5回に1点を取られ、今大会初めてリードを許すという苦しい展開でしたが、迎えた終盤7回、8番山下選手が甲子園への切符を引き戻す殊勲の右前打で同点に追いつきます。

直後に、2死満塁と最大のピンチに陥りますが、強気の直球で三振を奪い、逆に流れを手繰り寄せます。

すると10回、力投を続ける七島投手が、自らのバットでチーム初の長打となる2塁打。その後、1死2・3塁から、3番徳重選手がセンター前に決勝打を放ち2点を勝ち越しました。

延長までもつれこんだ激戦は、3-1で鹿屋中央高校が勝利し77出場校の頂点に立ちました。



延長10回、決勝打を放った徳重選手



神村学園を相手に力投するエースの七島投手



喜びを爆発させる選手たち



鹿屋中央



試合後、選手に胴上げされる山本監督



41歳。鹿屋市出身。社会人野球を経て26歳でコーチに、38歳で監督に就任。

大変なことを成し遂げたという思いが、決勝戦翌日の朝になつてふつふつと沸いて来ました。市民の皆さんからは、日頃から、本当に沢山の応援を頂き、これを力に変えて、良い結果に繋がっています。夏の甲子園初出場により、これまでの恩返しが少ない中でも出来たのではないかなと思っています。

甲子園では、うちのチームはピッチャーが3人いますので、バッテリを中心に守備からリズムを作って、攻撃的に得点していきたいですね。そのためには、とにかく粘って粘ってうちらしく辛抱強く戦っていききたいと思っています。

甲子園では結果を残せるように、感動を残せるように、ひたむきに頑張っていきたいと思っています。また、皆さんから頂いた心強い力は選手たちに伝え、その力を甲子園で発揮できるように、頑張りたいと思います。ご声援よろしくお願いします。

山本信也監督